波多野　林一

―和の生涯―

【略歴】

1886 年（明治 19 年）船井郡三宮村（現在の瑞穂町）の山内三郎兵衛の二男として生まれる

1906 年（明治 39 年）京都府立第一中学校卒業を卒業し、早稲田大学商科入学

1911 年（明治 44 年）郡是製糸株式会社　入社

1913 年（大正 2 年）　羽室嘉右衛門の五女すゑと結婚。同時に波多野鶴吉と夫婦養子縁組をする

1918 年（大正 7 年）　常務取締役に就任、洗礼を受ける

1938 年（昭和 13 年）第 4 代社長に就任

1947 年（昭和 22 年）京都地区選出の参議院議員として国政に参画

1958 年（昭和 33 年）取締役会長に就任

1962 年（昭和 37 年）逝去

和を以て貴しと為す

「以和為貴」の 4 字は、よく揮毫に用いた愛好の文字でした。人となりはまことに寛容と慈愛にみちたもので、聖徳太子の「和を以て貴しとなす」という言葉は波多野林一の終生の信条です。この信条は独り自らの処世の核心であったばかりでなく、多くの人を率いて事業を営む上においての要諦でもありました。人に接して春風の如く、事に対して力を用いず作を弄せず、時に困難に当面して悠揚迫らず、温容と慈眼とはいかなる場合にも変えることがなかったため、慈父のごとく、統率者として、えもいえぬ安心感を人みなに抱かせたのです。

郡是製糸株式会社激動の時代

大正から昭和の初期にかけて第一次世界大戦後の不況に続いて人造絹糸の台頭が著しく、深刻な世界恐慌の余波を受けて、日本の蚕糸業は永く不振の域を脱し得ず、会社の経営もしばしば苦境に際会しました。
加えて会社創設以来の功労者である専務片山金太郎が逝去、波多野がその後の専務に就任します。翌年には教育総理の川合信水が退社。さらに翌年には社長遠藤三郎兵衛が亡くなります。しばらくは社長を空席にして波多野を含む 3 名の役員で首脳を形成し、2 年後に波多野が社長に就任します。社内外ともに多事多難を極めた時代でした。このような情勢の中、取締役･取締役社長と実に 20 年の長きにわたり重責を担い、その間、会社創立の精神を体し、和をもって人を導き、苦難の中によく社業を維持し、振興を図りました。

新規事業への転換

特に第二次世界大戦勃発時から終戦後一応の復興を成し遂げるに至るまでの、およそ 10 年にわたる期間は、会社はつねに興廃の岐路にあり、この苦境の中において善後の措置を誤らず、しかも寛容にしてよく人の言を用い、一方において蚕糸業を守りつつも、新規事業への転換を図り、今日の郡是の基礎を培いました。（1946 年（昭和 21 年）メリヤス肌着、1949 年（昭和 24 年）機械の生産を開始。この他にもソックス、ペニシリン、ビタミン剤、石鹸などの製造を始める）また波多野社長は郡是製糸だけでなく、近江絹糸紡績や大日本蚕糸会など社内外問わず 20 社にもおよぶ会社や団体の社長･役員をつとめました。